

# 日本初期農耕段階の食素材と雑穀

寺 沢 薫\*

## はじめに

橿原考古学研究所の寺沢と申します。きょう、与えられました話題提供と申しますが、「日本初期農耕段階の食素材と雑穀」ということで話をしろということでございます。初期農耕段階といいますと、非常に規定がむずかしくなっています。おそらく縄文農耕の問題というのが大きくすえられてくると思いますけれども、それも含めまして、私がおもに対象としておりますのは弥生時代のほうでして、弥生時代に焦点をすえて、考古学的な立場から特に植物遺体の出土状況というものを資料にしまして、若干話題提供をしていきたいと思っております。

弥生時代というものが水稻に主眼をおいた新しい生産基盤にたった農耕社会であるということについては、もはや現在では疑う方はおられないんじゃないかと思うわけです。渡部先生もいわれておりますように、コメというのは、第一に味覚が非常にすぐれているということ。二点目としては粒が大きくて、<sup>脱</sup>稈性に富んでいて、調理がしやすい。あるいは三点目として生産性が著しく高く、収穫の安定が見込める。そういった理由で、水田でのコメというものの生産性をいかに高めるかということがわが列島の中でも、弥生時代以来非常に悲願であったということでもあります。

したがって、弥生時代の農耕の研究というのも、水田の農耕の技術というものの解明に非常に力をそそがれまして、水稻農耕こそが日本文化の原点だ

---

\* たらさわ かおる、奈良県立橿原考古学研究所

という考えまで生まれておりますように、今までの考古学研究というものの中心が水田でのコメの技術的な解明ということに注がれてきているわけです。

ところが最近、民俗学の立場でも、日本文化というものを稲作を機軸とした価値体系と、それからイモとか、あるいは今回のシンポジウムのテーマであります雑穀という、畑作を機軸とする価値体系というものにやはり注目していく必要があるとする傾向があります。実際、私どもが植物遺体を通して、弥生時代におけるコメの生産性、どれだけ弥生人がコメを生産し、消費しただろうかということを考えていきますと、よく博物館でみかけますような水田に一面黄金色の穂をたれたような水田というものをなかなか想定しにくい。あるいは毎日おコメを食べていたような考え方というのはもはや捨て去らなければならないということが考えられまして、そこにやはり畑作、雑穀、イモ、あるいは堅果類というものの研究の意義というのが最近出てきたんだらうというふうに思うわけです。

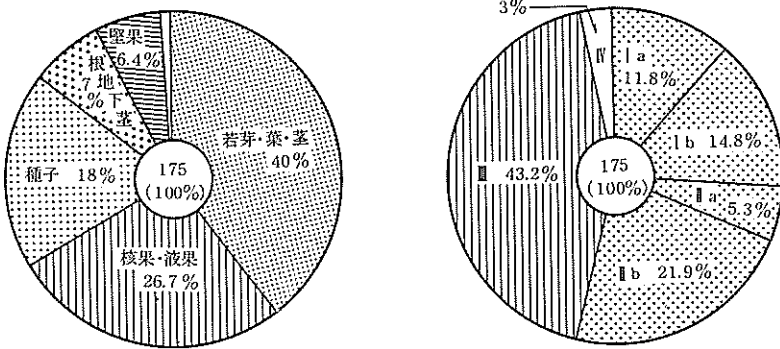
ということで、雑穀栽培の研究というのは考古学的にも非常に立ちおくりしている面がございまして、ようやくここ1970年代後半に植物遺体の研究というのが、ここにもご臨席されておられます粉川先生とか、松谷先生なんかのご努力によりまして進められました。そして、われわれも当然そういう報告をしていかなければならないという立場に置かれるようになって、ようやく資料が集積しつつあるという現状であるわけです。

## 1. 弥生時代の食素材と雑穀

前おきはそれぐらいいたしまして、初めにいま申し上げましたようなことを踏まえまして、弥生時代の遺跡の中から雑穀というのがどういう出方をしているか、あるいは数的な出方をしているかということはずっと概観していきたいと思うんです。

最近の新しい資料というのは十分まだひろっていないんですけれども、1981年までの私どもの集計によりますと、弥生時代の遺跡から植物遺体が確認され

ている遺跡が224ほどございます。そこから出土している植物遺体の種類というの、298種類にもものぼっています。これは単純に縄文とは比較できないわけですが、つまり最近の縄文時代の新しい成果がまとめられていないので、渡辺誠先生の植物遺体を水洗選別するような以前の段階の資料と対応せざるを得ないんですけれども、かなり数的にふえているということがいえるわけで、そのうち、食用に供することができる食べ物というのが175種、およそ出土しました遺体の種類の59パーセントを占めているわけです。



A. 植物質食料の食用部位の比率 (有用3種を除く)

B. 食用植物の摂取要素による比率

図1 弥生時代植物食の摂取要素

その内訳はどういうものかといいますと、図1 Aにまとめてございますけれども、圧倒的に多いのはやはり茎とか葉とか、あるいは若芽というものを食用にするというのが40パーセントほどございます。それに次いで、これは果実類ですけれども、核果、液果の類は26.7パーセント、それから穀物類の多くはこれに含まれますけれども、いわゆる種子を食用とするというのが18パーセント、それについて根茎類であるとか、堅果類というのが種類のうえではあるわけです。今回のシンポジウムには直接関係ございませぬけれども、特にイモ類というものは遺跡から発見されるケースが現在ほとんどないわけで、当然こういうものを想定してきますと、このグラフそのものがかなり大きく変

わっていこうと想定されます。

次に、ちょっと視点を変えまして、図1Bのグラフですけれども、これは食用植物の摂取要素、つまり人間の体の活動にどう影響を与えるかということで分けると、Iというのはでんぷん質とか、あるいはマメのように良好な蛋白質を含むものもございませうけれども、人体にとって良好なカロリー源になるというものです。I aというのはその栽培しているもので、これがだいたい11.8パーセントですから、きょう、テーマになっております雑穀、あるいはマメ、コメも含まれますけれども、そういうものがほとんどこの中に入ってくる。

それからI bというのは、ドングリなどの堅果類で、縄文時代以来の主要なでんぷん質食料になっています。これは栽培しておりませうけれども、14.8パーセント。それに次ぎまして、II類というのは準カロリー源になる食べ物ということで、たとえばモモとかウリとか、多くの畑作物および同様の果実類、これには自然に採集できる果実類、そういうものも含まれます。いわゆる糖質をかなり含んでいるようなものということで、これは栽培と非栽培とに分けますと、II aが5.3パーセント、II bが21.9パーセント。残りの半数は、III類というのになるんですけれども、これはそういう意味でいいますと、ビタミンとか鉄分を含みまして体のバランスをとるものです。これには明治時代とか江戸時代の救荒植物が少なからずありまして、救荒用になりうるものという考え方でございます。

次に、図2をご覧ください。ここでいう雑穀というのはムギもソバも全部含んでの解釈であるわけですが、これは遺跡の数からみますと、193遺跡ある中で、イネが約3分の2を占めております。残りの3分の1がムギであるとかヒエであるとか、そういう雑穀類の出土パーセンテージです。この中でやはり雑穀

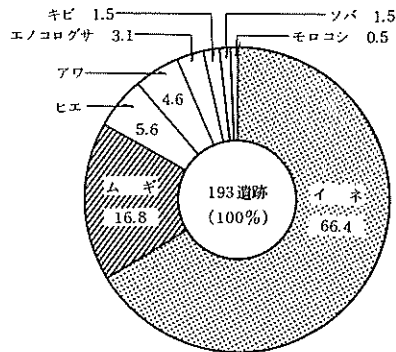


図2 コメと他の雑穀の出土比

類が3分の1を占めているということに注目をいただきたいと思います。

さらに注意したいのは、図3であります。これも弥生時代の植物食全体の中で、それぞれが遺跡数としてどれだけ出土しているかというグラフであります。これを見ますと、イネを越しまして、ドングリ類がトップである。それに含めてクルミ、クリという、いわゆる堅果類全体をみますと、イネを越えてかなりの量が弥生時代の遺跡においても出ています。ということで、縄文時代から弥生時代への移行が必ずしも採集から栽培へという形で、全く転換しているというのではなくて、かなりの量で堅果類が出ている。それから雑穀ではこの中にムギというのが登場しております。あと以下は、図2に掲げましたような比率で、残りの雑穀類が出ているわけです。

いまご紹介しましたように、弥生時代の遺跡の中でも雑穀類とか、堅果類というものがかなりのパーセンテージを持って出現しているということがお分かりになったのではないかと思います。それでは具体的にこういう雑穀類が列島の中でどういう出土状況をしているのかということを見ていきたいと思います。

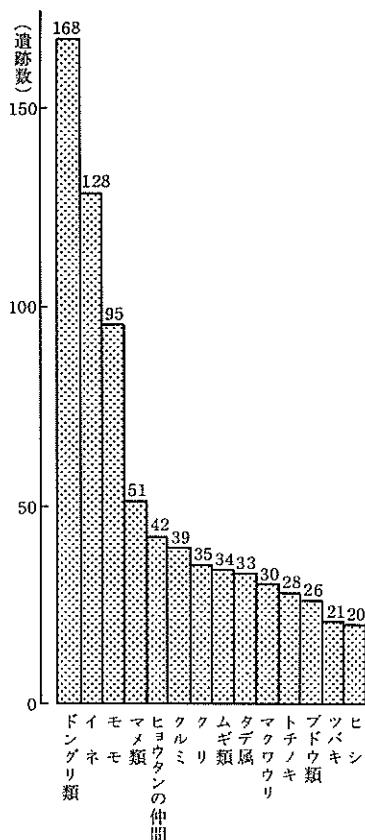


図3 弥生時代植物食の出土遺跡数

## 2. 日本における雑穀の移入

表1は、縄文から弥生時代の穀物資料をまとめたものです。下のほうに注釈を掲げておりますけれども、古い時代についてはコメの資料もそこに含めております。つまり東北地方の前期を除いては、弥生時代についてはコメの資料は一切ここから除いております。九州や西日本、あるいは東日本の中期以降にコメを記載しておりませんのは、莫大な量になりますので、あえてここから割愛しているわけでございます。

それからゴチック体で太く書いてありますが、これが実際、植物遺体が出ている例です。それから明朝体で印刷されておりますのが、圧痕という形で土器に付着していたりした例であります。それから各種の後ろに？マークをつけておりますのは、これは同定された方が断定せず、たとえばリョクトウではないか？というような形で報告されている例ですし、カッコ全体を？で囲んでいるのは、われわれ考古学をやっているほうの人間が時代限定が非常に怪しいんじゃないかという意見もあるという資料であるわけです。

この表は、そういうことで、かなり古い鑑定資料も含んでおまして、現在の同定の仕方からしますと、非常に危ない資料も中には含まれているわけです。しかし、私としては報告されたとおりにここに記載せざるを得ません。炭化したものを遺跡で実際に目にするのは多いのですけれども、なかなかそれをわれわれじしんで同定するということができないという現状があるわけです。

表1を見ていきますと、非常に古い雑穀といえますか、穀物資料というのは東日本の縄文時代中期から後期にかけてまとまってみられます。エゴマが非常に多いわけですが、ソバとオオムギ、つまり、北海道のはまなす野遺跡のソバと、それから岐阜のツルネ遺跡のオオムギ、あるいは埼玉の上野遺跡のオオムギ、こういった資料が縄文時代の中・後期に散見される、雑穀の中では非常に古い例であります。

こういう資料についてはまだ数が非常に少ないわけで、どういう評価をくだしていいかということはむずかしいわけです。実際これらの時期的な問題とい

表1 縄文・弥生時代の穀物資料

		九州	西日本	東日本
縄 文 時 代	後 期 後 半 以 前	熊本・古閑原 (コメ) ?	福井・鳥浜 (リョクトウ)  鳥取・桂見 (リョクトウ?)	北海道・はまなす野 (ソバ) 長野・大石 (エゴマ) 長野・荒神山 (エゴマ) 長野・月見松 (エゴマ) 長野・曾利 (エゴマ) 長野・上前尾 (エゴマ) 岐阜・ツルネ (オオムギ, エンドウ or ダイズ) ? 長野・伴野原 (リョクトウ) 埼玉・上野 (オオムギ) 岐阜・桜岡 (リョクトウ) 神奈川・ナスナ原 (エゴマ)
	後 期 後 半 ↓ 晩 期 前 半	福岡・四箇A (オオムギ, アズキ?) 福岡・広田 (アズキ or リョクトウ) 福岡・板付 (ヒエ <P>) 福岡・四箇東 (コメ <P>, ムギ <P>) 熊本・東鍋田 (コメ <P> ?) 宮崎・陣内 (ヒエ <P>) 長崎・小原下 (コメ) 長崎・筏 (コメ, エンドウ) 大分・大石 (コメ, アワ?) ? 熊本・上ノ原 (コメ, オオムギ, マメ類, ソバ <P>) 熊本・ワクト石 (コメ?) 熊本・古閑原 (コメ) 長崎・百花台 (コメ) 長崎・礫石原 (コメ) ?		青森・石亀 (ソバ <P>)  北海道・東風泊 (ソバ <P>)
	晩 期 後 半	佐賀・菜畑 (コメ, アワ, アズキ) 長崎・山ノ寺 (コメ) 福岡・曲田 (コメ) 大分・恵良原 (コメ) ? 大分・萩原 (コメ) 佐賀・菜畑 (オオムギ <P>) 佐賀・宇木汲田 (コメ) 福岡・板付 (コメ・ソバ <P>) 佐賀・田端 (コメ) 長崎・藤山 (コメ) 長崎・脇峠 (オオムギ) 佐賀・丸山 (コメ)	兵庫・口酒井穴森 (コメ) 大阪・鬼塚 (コメ) 鳥取・菅木 (ヒエ, キビ) 広島・帝釈峯越岩陰 (コメ) 兵庫・今宿丁田 (コメ) 兵庫・岸 (コメ) 大阪・四ツ池 (コメ) 京都・京大橋内 (コメ) 大阪・長原 (コメ) 大阪・久宝寺 (コメ)	岩手・九年橋 (ソバ <P>)  埼玉・真福寺 (ヒエ, リョクトウ, ソバ, ゴマ) ?
前	福岡・夜白 (オオムギ) 佐賀・菜畑 (ソバ <P>)  福岡・板付 (アズキ, コムギ <P>) 福岡・津古内畑 (マメ類) 福岡・刺崎 (アズキ?) 福岡・門田 (ムギ, マメ類) 福岡・諸田 (オオムギ, モロコシ, ア ズキ?) 福岡・犀川 (コムギ) 福岡・須川 (オオムギ) 福岡・立岩 (アワ)	岡山・津島 (ヒエ) 鳥根・タテチョウ (ソバ)  広島・亀山 (ヒエ)  三重・納所 (ソバ)	青森・亀ヶ岡 (コメ) ?  千葉・荒海 (コメ)	

弥生時代	前期	福岡・松ヶ迫 (マメ類) 山口・綾羅木 (キビ, モロコシ, コムギ, アズキ?) 山口・下東 (アズキ, エゴマ) 山口・宮原 (オオムギ, コムギ, ダイズ) 山口・無田 (オオムギ, コムギ, アズキ) 山口・辻 (マメ類)		青森・剣吉荒町 (コム) 青森・是川中屋 (コム) 青森・是川堀田 (コム) 青森・砂沢 (コム)
	中期	長崎・里田原 (マメ類) 福岡・種畜場 (マメ類) 福岡・横間山 (アワ, アズキ) 福岡・馬場山 (マメ類) 大分・下城 (オオムギ) 大分・台ノ原 (アズキ) 山口・岡山 (ダイズ, アズキ, リョクトウ) 山口・天王 (ダイズ, アズキ)	愛媛・土居窪 (ムギ, ササゲ) 大阪・池上 (ムギ) 愛知・新田 (コムギ?) 岡山・南方 (ムギ) 大阪・池上 (マメ類) 大阪・亀井 (アズキ, マメ類, エゴマ) 和歌山・太田黒田 (アズキ) 愛知・篠束 (コムギ?) 香川・紫雲出 (ヒエ, アワ, キビのいづれか) 徳島・昼間土取 (アズキ?) 大阪・瓜生堂 (アズキ?) 大阪・田口山 (エンドウ?) 三重・納所 (ヒエ)	
後期	前期	長崎・原ノ辻 (オオムギ, コムギ) 福岡・板付 (マメ類) 福岡・四箇 (ハトムギ?) 福岡・小田 (マメ類)		千葉・城の腰 (アワ)
	後期		岡山・桃山 (キビ) 大阪・芝谷 (アワ・ヒエ) 奈良・鴨都波 (ゴマ)  大阪・池上 (マメ類)  岡山・川入 (アワ)  愛知・宮西 (アワ)	静岡・伊場 (ダイズ) 静岡・滝川 (ダイズ, アズキ or リョクトウ) 静岡・登呂 (ヒエ, アズキ) 群馬・日高 (ヒエ) 静岡・山木 (ヒエ, ソバ)  東京・甲の原 (オオムギ, コムギ, ダイズ) 長野・高松原 (コムギ, アワ or ヒエ) 長野・橋原 (アワ・ヒエ, ムギ?) 福島・天王山 (アワ) 東京・原屋敷 (ヒエ)
古墳時代	前期	熊本・古閑原 (オオムギ)	大阪・瓜生堂 (ソバ) 大阪・四ツ池 (マメ類) 奈良・纏向 (アズキ?) 奈良・矢部 (ダイズ, アズキ?) 奈良・大西 (ソラマメ)	石川・猿橋 (アワ) 新潟・千種 (マメ類, ゴマ) 千葉・阿玉台北 (ダイズ?)
	後期	大分・二本木 (アズキ) 大分・安国寺 (オオムギ) 山口・北迫 (エンドウ?) 山口・岡原 (オオムギ, ヒエ, エンドウ, ソラマメ)		

\* 東北地方の初期の例を除いて、弥生時代以降のコム資料は割愛した。

\*\* 種子資料は太字, 土器片などの圧痕資料は明朝体, 花粉やプラント・オパール分析資料は (P) で示した。

\*\*\* 種などの不確実資料は (?) を, 出土状況など時間的な不確実資料は ( ) 外に ? を付した。



うものを疑問視する研究者もいるわけですが、一応ここでは東日本にこれだけ集中して出ているということの意味を考える必要があるだろうという立場で掲げたわけです。これはあとの話とも関わってくるわけですが、九州のほうで縄文時代の後期後半以降集中して出てくるコメを含む穀物資料に対応する形で、より古い時期に東日本で穀物資料が集中してみられるということ、そしてこの分布状況から推察しますと、おそらく両者は列島に入った系列が違う可能性があるんじゃないだろうか考えるわけです。

そうしますと、きのうの氏原先生のソバの秋作ソバと夏作ソバのお話にもありましたように、北海道のほうと、それから西日本のほうとの遺伝子的なソバの傾向が違うというお話もありましたし、あるいはムギというものが長江の系列にのるルートと、それから東北アジアから随伴雑草としてのライムギをともなっている夏作のムギというのがあるんだというような研究等を踏まえたと、どうも北方農耕のルートで非常に早い段階に日本に入ってきている可能性というの、これは捨てがたいのではないのでしょうか。

たとえば沿海州のほうではヤンコフスキーという時期、これは紀元前10世紀以前のものですけれども、やはりそのマラヤパドチチカ遺跡というところでオオムギが出ているというようなことも考えますと、どうも北方ルートでこの段階に入ってきた可能性はある。ただ、それをどう評価するかというのは非常にむずかしいわけですし、一応こういう雑穀類というものが入ってきている可能性があるということの指摘にとどめたいと思います。

それでは次に、西日本と九州ではこの段階でどうかといいますと、九州では熊本の<sup>こがばる</sup>古閑原遺跡というところでコメの出土という報告があります。これも非常に時期的な同定が危ないという考え方が大勢でして、すぐには評価しがたい資料なんですけれども、西日本の方の鳥浜遺跡ではリョクトウが出ており、これは前期です。鳥浜貝塚ではヒョウタンが早期まで遡ってございますので、いわゆる栽培食物というものが非常に古い段階にある。それから鳥取の桂見遺跡のほうでは、これは量的にもかなりまとまって、リョクトウと思われれますマメが出ております。これは縄文時代の後期の段階です。

最近の調査では、九州のほうで、前期の礪式という土器の型式がございますけれども、その段階で長崎県の伊木力遺跡<sup>いきりき</sup>というところからモモの種が出ている。これは層位的にも確かなようで、どうもそういう段階にこういった栽培食物が単発的に入ってきているという事実はまだ認めざるを得ないと思います。ただ、それがどういう形で日本に落ち着いたかというのは非常に問題でして、これはあとのルートの問題にもかかってくると思いますけれども、この段階ではそういうまとまったトータルな形ではなくて入ってくる可能性というものがあるのではないかと。これは次の段階にも同じことがいえるわけです。

そこで、次に、縄文時代の後期の後半から晩期の前半という、そういうグループのところに目を移したいわけですが、ここではやはり九州に集中して資料がみられます。この段階ではかつてはコメの圧痕が時期的に問題があるとか、あるいはコメかどうか分からないというような論議もあったんですけども、最近ではプラント・オパールでイネが出てきたりということもありまして、どうもやはりこの段階の資料は基本的には間違いないだろうとされています。もちろん個々の資料につきましては、問題がある資料も？マークで示してあるようにございますけれども、やはり九州の後期の後半、土器でいいますと、西平式とか三万田式、あるいは晩期初頭の御領式、それから前半の黒川式、こういう時期にここに掲げましたようなコメを含みます雑穀類というのが入ってきているということはまず疑いないでしょう。

ところでその分布に注目していただきたいんですけども、出ておりますところが一つは玄界灘の周辺と、もう一つ非常に大きな分布を示しますが、長崎県の島原半島から有明海沿岸という、こういう地域でございます。この地域というのはむしろ後続します弥生文化の初頭におきましては、玄界灘沿岸の地域にとって代わられるような地域でして、そういうところにまず非常に早い段階にこういう穀物類が入ってきているということは分布のうえからは興味深いわけです。

これと関連しまして、先ほどの東日本のほうの系譜というのは、一応ここでは除外して考えて、九州のほうから、いわゆる西のほうから入ってくるルート

というものを次に中心的に考えていきたいと思うわけです。

私は、この縄文の後・晩期から弥生時代の初頭にかけてのコメを中心にした穀物類、これは穀物だけの問題ではなくて、時期がもう少し下がりますと、モモとか、あるいはウリの類、メロン類、そういうものがやはり伴って入ってきておりますので、それを含めての話であるわけですが、これを1期から4期までに分けて考えたらどうだろうかと思っております。それを示したのが図4です。

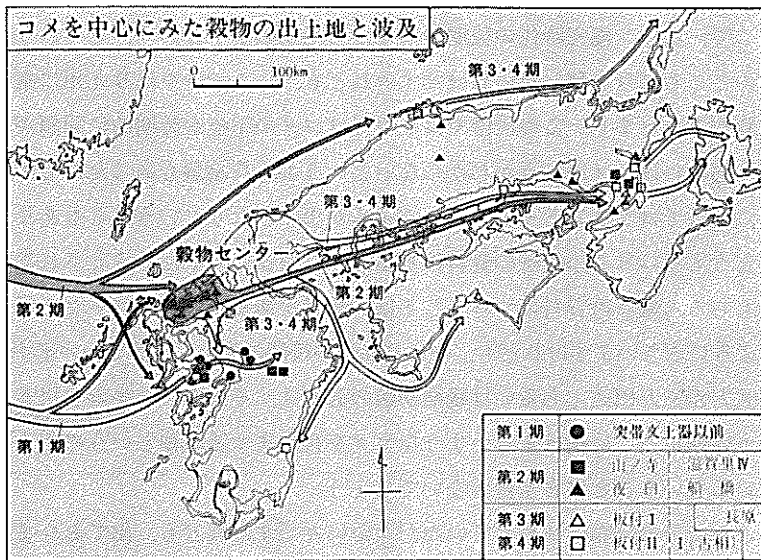


図4 コメを中心にみた穀物の出土地と波及

ここで第1期というのが縄文時代の後期の後半から晩期前半、いわゆる玄界灘周辺と、おもな中心は島原半島から有明海というところに流入してくる穀物群というのがあるわけです。ところがこれは考古学的な遺物からいいますと、第2期でお話しますが、いわゆる弥生時代の稲作にともなった非常に大きな文化要素である大陸系の磨製石器群、いわゆる農耕具類、木製品も含めまして、そういったものはいまのところ伴っていないわけです。どういうものが

あるかという、打製の石包丁（穂摘み具）、それから打製の石鋤といわれているもの、あるいは打製の石鎌、そういったものがどうもこの地域に出てきます。

それではこれが弥生時代の農耕、雑穀なり、あるいは水稻に直結するかというと、私はどうもそうではないのではないかと思います。地域的にも島原半島から有明海を越して、熊本県のかなり山間地域の中に入り込んでいくという分布を示しております、場合によっては大分県のほうにまでこれが入り込んでいくという分布を示しておりますけれども、どうもこの穀物文化といっているのかどうか分かりませんが、このグループというのは、その段階でポシャって行く。弥生文化の、いわゆる水稻を中心にした弥生時代の農耕の日本における淵源にはなりえなかったということを現状ではいわざるをえないわけです。

それでは、弥生時代の淵源になるのは何かというと、やはり第2期の流入のグループであるということです。第2期のグループというのは、これは玄界灘周辺、いまの博多から唐津の周辺ですけれども、そういうところを中心に入ってくる第二波というのがこれがどうも弥生時代の水稻農耕の淵源になります。

ご存じのように、菜畑遺跡では山ノ寺式の水田址が出ておりますし、板付遺跡では若干おくれて夜白式の水田も出ております。佐賀県の曲り田遺跡というところでは水田こそ出ておりませんが、この時期のコメの資料、あるいはそれにとまなう大陸系の石器群というもの非常に大量に出ているわけです。

ちょっと余談になりますけれども、若干朝鮮半島のほうの例をざっと走ってご紹介したいと思います。朝鮮半島のほうでは北部のほうで榊目文土器の後期の段階で農耕の様相がみられるわけです。いくつかご紹介をしますと、たとえばピョンヤンの南京遺跡<sup>なんきんよう</sup>の31号住居跡という、これは榊目文の後期ですけれども、ここではアワが約1升到にドングリが伴って出てきております。それから黄海北道の智塔里遺跡<sup>ちたがり</sup>、これも榊目文の段階ですけれども、2号住居跡の土器の中にヒエかまたはアワという資料がございます。この榊目文土器の後期に伴います石器というのは、石製の鋤、あるいは牙製、骨製の鋤、それから同じく犁、

それから打製の石鋏、それからサドルカーンといわれます鞍型の擦り臼というものを伴っているわけです。

ちょうど紀元前の1000年頃ですから、B.C. 10世紀ぐらいに、これは時期的には若干問題があると思うんですけれども、北部のほうでもいわゆるコマ型土器といえますか、土器が無文化していく新しい農耕の段階に入っていくわけで、石器も磨製化していくという段階に入るわけです。

そういう段階では、たとえば先ほどの南京遺跡の36号住居跡ではコメが出てきております。ジャポニカタイプのコメが出てきておりますし、それにともなあって、同じ住居跡の中からアワ、キビ、モロコシ、ダイズといった資料が報告されております。それから石灘里遺跡の39号住居遺跡の中でもやはりアワとアズキの報告がございます。それ以外にこの段階になりますと、咸鏡北道の虎谷遺跡のモロコシ、キビとか、五洞遺跡のダイズ、アズキ、キビとか、かなり雑穀類というものが出てきております。

それに比べまして南部のほうはどうかといえますと、これはいまのところ、櫛目土石器後期に並行の段階での穀物資料というのはどうも検出されていないようですけれども、それに続きます無文土器の段階では、欣岩里遺跡、あるいは所山里遺跡からコメ、オオムギ、モロコシ、アワといった資料が出てきております。ただ、欣岩里と所山里というのは、標高が100~200メートルある非常に高いところで、このコメというのがはたして水稲であったかどうかというのは疑問であるわけです。

そうなりますと、佐賀県の菜畑遺跡のような第2期のコメの資料に非常に近い例というのが、やはり南部の西海岸にございます松菊里遺跡で出ているジャポニカタイプのコメの資料、あるいは大陸系の石器群というのが非常に菜畑遺跡とか曲り田遺跡のものに似ているということになるわけです。ですから第2期のコメおよび雑穀類の流入経路というのは、おそらく朝鮮半島の南部西海岸というものを經由したということは、植物遺体のうえでも、あるいは集落の立地景観のうえでも、あるいは考古学的な石器の組成のうえでも、まず、最も可能性の高いルートであらうと考えられるわけです。

それから第3期になりますと、第2期の玄界灘周辺の地域を中心にして、いわゆる昔からいわれております板付式土器、板付1式という文化が開花するわけです。これは非常に極地的に限られた文化でして、玄界灘の周辺から福岡県から佐賀県の一部の地域に認められるわけで、北部九州ではこの地域を中心にして、コメとか雑穀の資料、あるいはマメの資料というのが非常に集中して出てきます。たとえば貯蔵穴群の中から大量のコメとともにマメを伴っております春日市の辻畑遺跡とか、諸岡遺跡の壺、甕の中からはオオムギ、アズキ、モロコシ、コメというものが出ております。あるいはそれ以外の貯蔵穴の中からも、コメと雑穀類が大量に出ているということで、ここがやはりそれ以降、日本列島の中で、コメとか雑穀を伝播していくうえでのセンターとなっているということで、かりに日本における“穀物センター”というふうに呼べる地域ではないかと思えます。

それ以降は、いわゆる今までいわれていたような弥生土器の東進といえますか、東へ向かって流れていくという傾向がそのまま見てとれるわけで、その時期が第4期ということになるわけです。

いまざっと縄文時代の晩期から弥生時代の初めまでの穀物資料について段階的に見てきたんですけれども、やはり水田とか、農耕具とか、そういうものも含めまして、日本の弥生時代の農耕というものに直接つながってくるのは第2期の段階の流入であろうということがお分かりいただけたのではないかと思います。

### 3. 雑穀栽培の波及

次に、そういう雑穀栽培というものがコメとともに、それ以降の日本の中でどういう形で波及していったかという問題に移りたいと思います。図5をご覧ください。ここには雑穀類以外にウリ類、果実類も含めて記載しておりますけれども、前期、中期、後期という弥生時代のなかを追って、いわゆる畑作物というものがどういう分布状況を示しているかというものを掲げております。

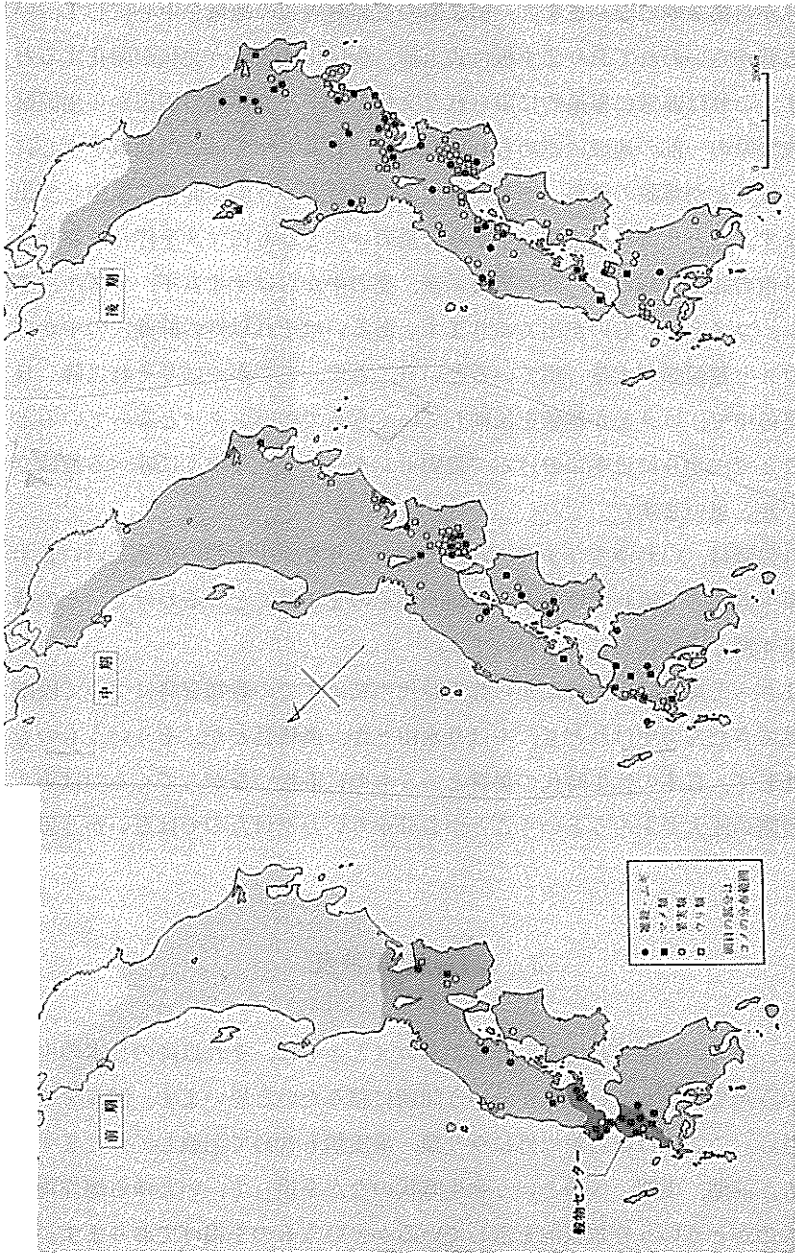


図5 弥生時代の主な畑作物の出土状況

特にここで注意してみたいのは、先ほど北部九州で穀物センターになったという地域のお話をしましたけれども、そこがどうも中期から後期にかけて、そういう雑穀類というものの出土例が非常に少なくなっていくという傾向があるわけです。非常に大きな目でみますと、これらはむしろ東の地域で逆に取り入れられていっているという、そういう傾向があるわけです。

たとえばコメと他の雑穀・マメ類との出土比をくらべた表2をご覧ください。

表2 コメと他の雑穀・マメ類との出土比

	九 州	西 日 本	東 日 本
前 期	15 : 16	10 : 4	1 : 0
中 期	13 : 12	19 : 12	4 : 1
後 期 ～古墳時代初頭	14 : 5	32 : 11	20 : 14

\* 種類による重複はさけて換算してある。

\*\* コメ：雑穀・マメの比。

ここでは非常に機械的な単純な比較なのですけれども、コメの出土している遺跡と雑穀やマメの出土している遺跡の数を比較して書いてあります。九州、これはほとんど北部九州なのですけれども、この地域では時代を追うにしたがって、雑穀とかマメというものが減っている傾向がある。逆に西日本では横ばいといっていいでしょうけれども、若干ふえながらも後期ではやはり減っているという傾向があるわけです。西日本でも九州でも、たとえば後期から古墳時代の初頭という時期をみますと、だいたい3分の1ぐらいになっているということがわかると思います。ところが東日本では、比率的に雑穀の比率というのがだんだんふえていっているという傾向がこれでお分かりいただけるのではないかと思います。

つまり、これは前期の穀物センターからの波及というものが必ずしも一様にいっているのではなくて、地域による需要のあり方というのに非常に差がある



ということを示しているわけで、特に東日本での後期になってからの検出例の増加というのはやはり東日本という、これは非常に大ざっぱな話で、地域的な問題以外に平野と山の問題とか、あるいは島嶼部の問題とかいうこまかい話にならなければならないんですけれども、たとえば西日本では非常に低地の弥生時代の集落が多い。東のほうでは集落自体が台地のほうが多い。あるいは長野県とか群馬県のような山間部の弥生時代の遺跡が多いということを考えますと、傾向として、後世にいわれております畑作地帯と水田地帯というのは東日本と西日本の代名詞のようにございますけれども、どうも弥生時代のなかでそういう雑穀地帯というものが東日本の中で定着していつているのではないかと。雑穀というものが東日本の中に順応していつている、という姿を弥生時代のこの段階で考えてはいけないうことであろうかということでもあります。

実際に東日本、特に関東地方なのでございますけれども、例えばもう少し具体的にいいますと、名古屋の朝日遺跡は、真っ先に先ほど第4期の早い段階にコメとそれから弥生前期の土器が到達した東の端といわれているところですが、この遺跡でも磨製の石庖丁の量というのは非常に少ない。代わって、スクレーパーのような打製の取穫具のようなものがそれを補う形で存在している。これが関東のほうにいけますと、なおさら顕著でして、磨製の石庖丁というのが非常に出土が稀になってきます。代わりまして打製の石庖丁と考えられるものとか、貝庖丁、あるいは先ほど島原半島のほうでもご紹介しましたような打製の石鍬といったものが、弥生時代の中期の後半ないし後期の段階に非常にふえてきているということも全く無関係ではないだろうと考えられるわけです。

実際に、いくつかの雑穀の出土の例をあげますと、これは中期以降、岡山県の上東遺跡では、これは古墳時代の初頭の例ですが、大きなピット、穴の中から甕が48個体出てきておりますけれども、そのほとんど半数の中にコメとアワが入っていたという例がございます。それから岡山の川入遺跡、これは後期の終末の段階ですが、井戸の中からコメが364粒と、同時にアワが108粒出ているという報告もでございます。

それからこれはかなりとびまして、群馬県の八崎遺跡では、住居跡の中に非

常に大きな広口の壺がありまして、その中にアズキがいっぱい入っていた。これも後期の終末の段階です。それから福島県の天王山遺跡では、かなり山の上なんですけれども、土器の焦片、焦土中から炭化米と、アワが合計3升5合集中して出てきた。というように、コメに伴って雑穀というもののかなりの量が東の地域では出土している、集中して出ているという例がみられるわけです。

#### 4. 弥生時代の畑作と雑穀

いままで特に植物遺体とか、いわゆる雑穀の遺体とか、若干農具の話もしてきたのですが、最後に実際にそういうものを生産したであろう畑のあとが検出されている例というのが、非常に少ないですけれども出ておりますので、ふれておきます。

水田というのは条件さえそなわれれば検出はたやすいわけですが、畑というのは非常にむずかしいわけで、現在弥生時代のものとして知られておりますのが、図6に掲げております静岡県の日黒身遺跡の例と、それからこれはちょっと古墳時代の初頭にかかってくるのではないかと思いますけれども、図7

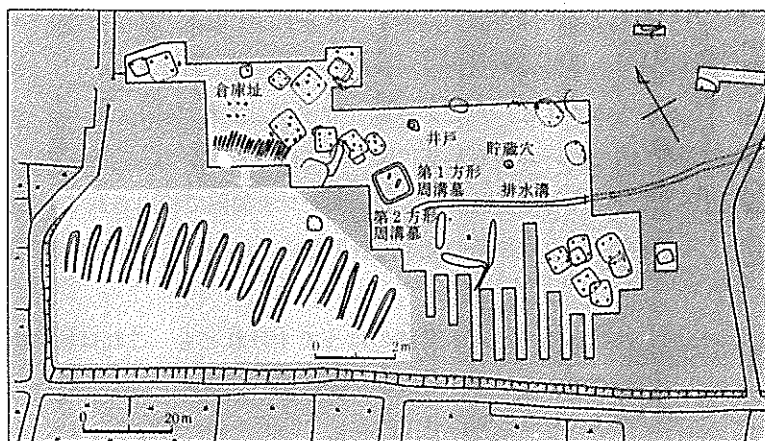


図6 静岡県日黒身遺跡の畑作遺構（「日黒身」加藤学園沼津考古学研究所を改変）

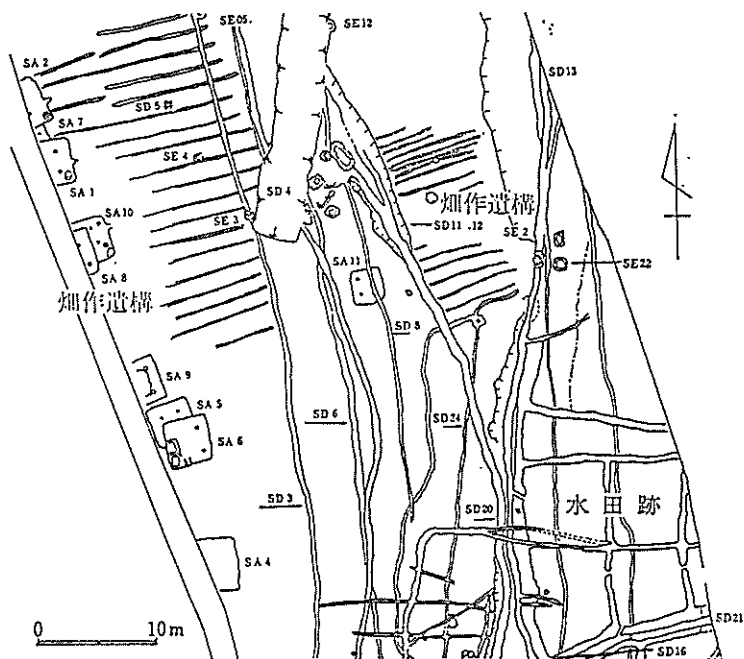


図7 群馬県小八木遺跡の畑作遺構

の群馬県の小八木遺跡の例がございます。最近では大阪市の加美遺跡というところでも、やはり古墳時代の初頭の畑の跡が検出されております。

こういうものをみますと、たとえば図6ですが、これは約100平方メートルぐらいの範囲の中で、いわゆる集落、居住地に接して幅が40～50センチ、長さが4メートルほどのうねが合計17条、30～80センチ間隔で検出されているという例がございます。これは後期の後半、目黒身式といわれております時期の畑の跡です。

それから図7の群馬県の小八木遺跡のほうですけれども、これは約300平方メートルほどの範囲の中でやはり同様のうねの跡が検出されております。これもやはり集落に付随しているわけで、図を見ていただいたらわかりますけれども、左のほうに住居趾群がずっと並んでおりまして、そのすぐ横に、これは微

高地状に畑が居住地に接近して存在する。さらにその東のほうには若干落ち込んでいる旧河道を利用したいわゆる微低地型の水田跡というものが展開している様子を示しているわけです。

実際にそこでどういうものが作られたかというのは、個々の遺跡ではわからないわけですが、表3に掲げましたように、現在、弥生時代で確認されております畑作物というのがイネを含めて37種類ございます。おそらくこういうものがこういう畑の中で作られていたんだろうと考えます。おそらくその集落に付随するというのは、近畿地方なんかは特に顕著なのですけれども、むしろ雑穀を考えるよりも果実類を考えたほうが畿内ではよろしいかと思うわけですが、そういう遺構が検出されております。

表3 弥生時代の畑作物

イネ科	イネ、アワ、ヒエ、キビ、モロコシ、オオムギ、コムギ、エンバク、ハトムギ
タデ科	ソバ
マメ科	アズキ、リョクトウ、ダイズ、ツルマメ、エンドウ、ソラマメ、ササゲ
ウリ科	ヒョウタンの仲間（ヒョウタン・ユウガオ・フクベ）、メロンの仲間（マクワウリ・雑草メロン・スイカ）、カボチャ
バラ科	モモ、ウメ、アンズ、スモモ、ナシ
カキノキ科	カキ
ゴマ科	ゴマ
シソ科	シソ、エゴマ
クワ科	アサ、クワ
キク科	ゴボウ
イラクサ科	カラムシ

現在確認されている畑作物は陸稲としてのイネをふくめて37種にのぼる。しかし、このほかにもイモ類や蔬菜類など未検出の作物がかなりあると思われる。

ただ、こういう遺跡をみますと、やはり微低地型にしろ、かなり広大な低地型の水田にしても、水田を中心にした立地景観というものを示している遺跡であるわけですから、どうもいま見つかっております畑の跡、畑作遺構というの

は集落に付随する補助的な畑しか見つからないだろうと思うわけです。ところが、たとえば山口県の綾羅木遺跡のように、これは非常に広大な台地地形をもっておりまして、かつては台地のすぐ下まで響灘の海であらわれていたというような遺跡であるわけで、実際コメも出ておりますので、その背後の谷といえますか、旧河道のところでコメが栽培されていたということは間違いなしと思うわけですが、大量の磨製の石鎌を出土している。熊本大学の甲元さんによりますと、こういうものはムギの収穫用ではないかと考えられております。実際に綾羅木遺跡では、アワとキビとモロコシなどが、コメとともにかなり検出されている。あるいは、このコメも陸稲を含んでいるのかもしれませんが。つまり、こういう遺跡を今後広域に調査すれば、かなり大規模な雑穀栽培の痕跡、大規模な畑の跡というのが調査されることもあるだろうということで、雑穀の栽培の痕跡、遺構については今後の大きな課題であると思っております。

だいたい今、私の考えておりますのはそのぐらいのことで、これで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。